

大浦光信と津軽氏

～津軽藩発祥の地・種里城跡とその周辺～

鱈ヶ沢町教育委員会 中田書矢

江戸時代を通じて本州北端の地域を領した弘前藩津軽氏の勢力の源流は、青森県鱈ヶ沢町から始まったとされている。

延徳3年(1491)、下久慈(岩手県久慈市)の領主であった南部光信は、軍勢を率いて種里城(鱈ヶ沢町)へ入部。後に一族は大浦氏として、津軽平野内陸部の大浦城(弘前市)を本拠とした。

大浦光信―津軽氏の始祖とされる人物であり、その後三代をへて、為信が大浦氏を継いだという。この大浦為信がのちの津軽為信である。津軽氏の居城はその後、大浦氏時代の種里城・大浦城から堀越城へ、そして弘前城へと移転した。津軽氏由緒の地である種里城跡は「津軽藩発祥の地」とも呼ばれ、歴代藩主や地域住民により今日まで大切に保存されてきた。現在、弘前城跡・堀越城跡とともに「津軽氏城跡」として国史跡に指定されている。

遠く離れた横手市と鱈ヶ沢町であるが、近年の研究成果によると、そのルーツは金沢城(横手市)の城主であった光信の祖父「金沢右京亮」につながるとされる。令和2年(2020)10月7日、光信公鱈ヶ沢町入部530年を記念し、光信公ゆかりの地である横手市・久慈市・鱈ヶ沢町・弘前市・黒石市の首長が集い「歴史文化で結ぶ交流宣言」が行われた。令和新時代の新たな交流のステージに向けて、横手地域の皆様とご一緒に地域の歴史を共有しあえる資産として、今日明らかとなっている種里城跡の実像やその歴史的意味についてご紹介したい。

(1) 下久慈とその周辺

元中8年(1391)に三戸南部氏が長久寺建立、久慈川河口の旧長久寺村(久慈市田屋町、新井田地区)が下久慈推定地とされる。蛭子神社棟札に「南部信濃守」。

(2) 種里城跡の実像

主郭地区 独立した曲輪は主郭のみ。遺構変遷については大きく5期。最盛期となる第2期を中心に上段に大型掘立柱建物(城主の館)。下段には小型建物(家臣屋敷地か)。その後、遺物量は減少するが17世紀初まで城館機能続く。

城前地区 主郭直下において旧赤石川の河床礫と低湿地の状況を確認。

城下地区 赤石川沿いの自然堤防上に沼状の埋没湿地、中世の井戸等を確認。

セツバヤシキ地区 主郭北側外郭の階段状の平場群。堀切などの囲郭なし。16世紀末以降、主郭地区で遺物量が減少するのに対し、セツバヤシキ地区では増加。城館中心部が変化。

下門前地区 長勝寺(光信菩提寺)推定地。土塁・切岸で囲郭する平場群で堀切などの囲郭なし。主要平坦地の造成は中世とみられるが遺構・遺物の分布は僅かで生活感が薄い。

上門前地区 下門前地区に比べて小規模な平場群。溝で区画された火葬骨群。集団墓地。

(3) 津軽藩発祥の地としての種里

光信公廟所の整備と変化する遺跡景観：16世紀代～17世紀初～18世紀代、19世紀以降。津軽氏の聖地、慰霊祭、地域住民との関わりの中で。

●大浦光信（南部光信）と横手・久慈・津軽略史

- 応永 18 年 (1411) 仙北刈和野で秋田安東某と南部守行が合戦 [聞老遺事]
 長祿 2 年 (1458) 南部三郎 (金沢城主カ) が小野寺泰道を支配下におく [小野寺家系図]
 寛正 6 年 (1465) 南部氏の馬の進上に対し小野寺氏合戦 [蜷川親元日記]
 寛正 6 年 (1465) ~ 応仁 2 年 (1468) 小野寺泰道が南部氏を破る [小野寺家系図]
 [高屋豊前覚書] 他 南部屋形次男左京亮が上久慈、三男右京亮が下久慈を領す
 金沢右京亮 (家光) が仙北金沢で自害、大曲和泉守の助けで若君の
 南部右京亮 (家信) が南部に逃れ本領下久慈に戻る
 文明 13 年 (1481) 「南部信濃守嫡之右京助久信」金峯山社壇建立 [久慈市蛭子神社棟札]
 延徳 3 年 (1491) 光信が下久慈より種里に入部、種里城に拠る [前代歴譜]
 一丁田老岐守信健、金備中、玉隈左衛門五郎、神丹波、小山内越前、
 三上近江、黒土刑部、小山内勝健、大曲和泉等、総勢凡三百五十人
 明応 元年 (1492) 光信が赤石城を築く [前代歴譜]
 文亀 2 年 (1502) 光信が大浦城を築いて嫡男・盛信をおく [前代歴譜]
 永正 13 年 (1516) 「南部信濃守嫡之右京助種信」建立 [久慈市御嶽神社棟札]
 大永 3 年 (1523) 光信が種里八幡宮を建立 [種里八幡宮棟札]
 大永 6 年 (1526) 光信が種里城で死去 (命日 10 月 8 日) [前代歴譜]
 享祿 元年 (1528) 盛信が種里に長勝寺 (光信菩提寺) 建立 [長勝寺並寺院開山世代調]
 * * *
 天文 19 年 (1550) 為信が赤石城で生れる [歴譜] 他←大浦四代為則の弟、武田守信の子
 永祿 10 年 (1567) 為信が大浦為則の婿養子となる [歴譜] 他←大浦五代を継ぐ
 [系胤譜考] 他 久慈平藏 兄 (信義) と不和にして久慈を捨出奔して津軽に至り、大浦氏の養子となる
 元亀 2 年 (1571) 「南部之内信濃守信長」薬師堂西光寺建立 [久慈市蛭子神社棟札]
 天正 18 年 (1590) 大浦為信が豊臣秀吉より津軽領を安堵される
 天正 19 年 (1591) 久慈備前守直治が九戸城に籠城・処刑 (九戸政実の乱)
 文祿 3 年 (1594) 為信 (津軽藩祖) が大浦から堀越へ居城を移転
 慶長 16 年 (1611) 信牧 (二代藩主) が弘前城に居城移転
 明暦 2 年 (1656) 黒石津軽家の成立 (初代信英)
 * * *
 明治 18 年 (1885) 津軽承昭 (十二代) 東京移住後、初めての種里参拝
 明治 39 年 (1906) 津軽英麿 (十三代) 藩祖為信 300 年祭に際し種里参拝
 昭和 6 年 (1931) 津軽義孝 (十四代) 弘前、黒石、種里を訪問
 昭和 8 年 (1933) 種里城址碑建立
 昭和 39 年 (1964) 津軽華子ご婚約報告のため光信公廟所参拝
 昭和 51 年 (1976) 津軽藩発祥之地碑建立 (光信公 450 年祭記念)
 昭和 63 年 (1988) 種里城跡発掘調査始まる (光信公の館建設に先立つ緊急調査)
 平成 元年 (1989) 鱒ヶ沢町制施行 100 周年 (光信公の館建設始まる)
 平成 2 年 (1990) 光信公の館建設。光信公銅像建立。入部 500 年祭
 平成 7 年 (1995) 津軽晋 (十五代) 当主となり初めて種里訪問
 平成 14 年 (2002) 種里城跡が国史跡となる (史跡津軽氏城跡)
 平成 30 年 (2018) 久慈市・鱒ヶ沢町が「歴史文化で結ぶ友好協定」締結
 令和 2 年 (2020) 入部 530 年記念事業「歴史文化で結ぶ交流宣言」

津軽氏略系図 [津軽一統志] 他



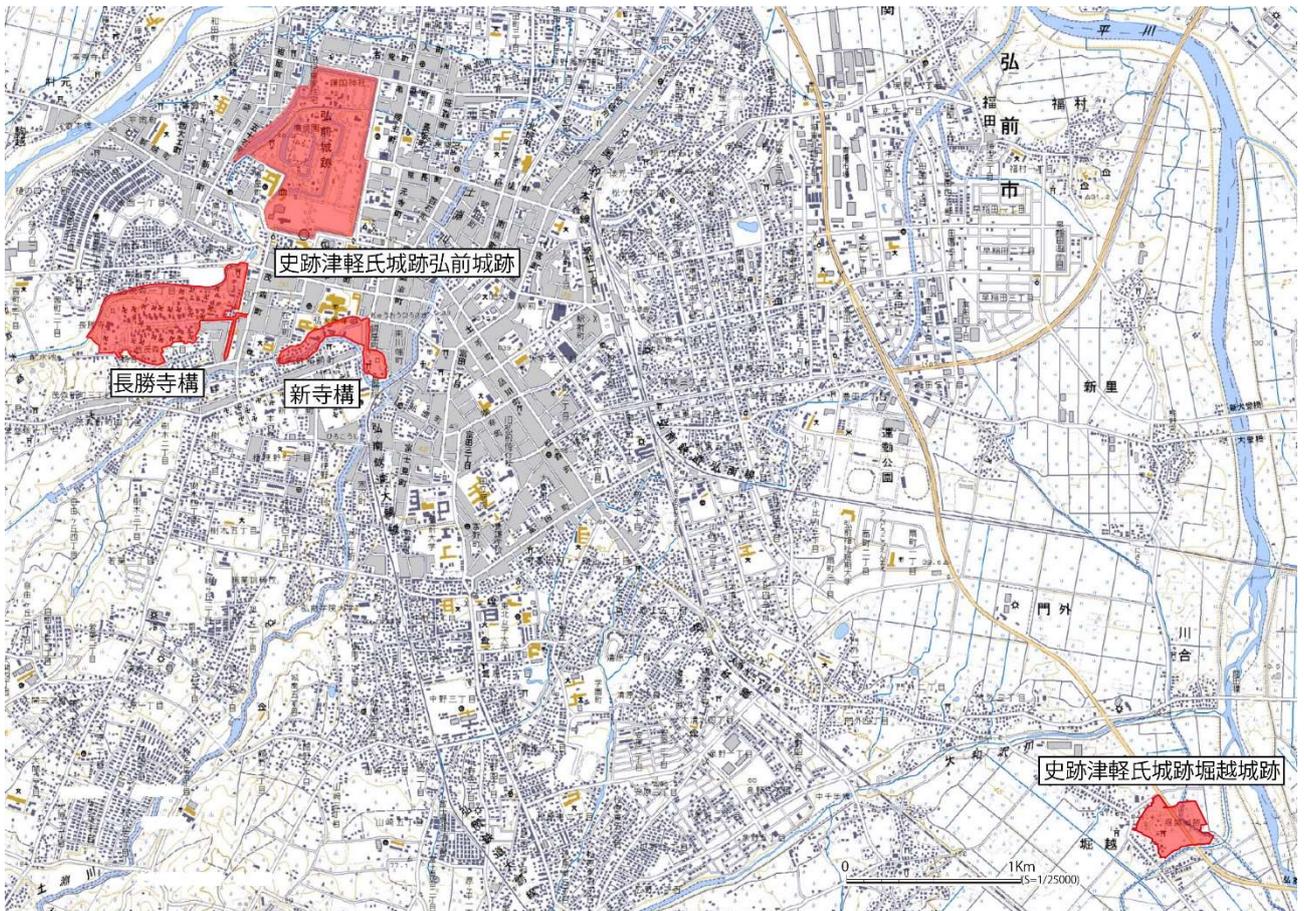
肖像画「津軽先祖歴代絵像」より



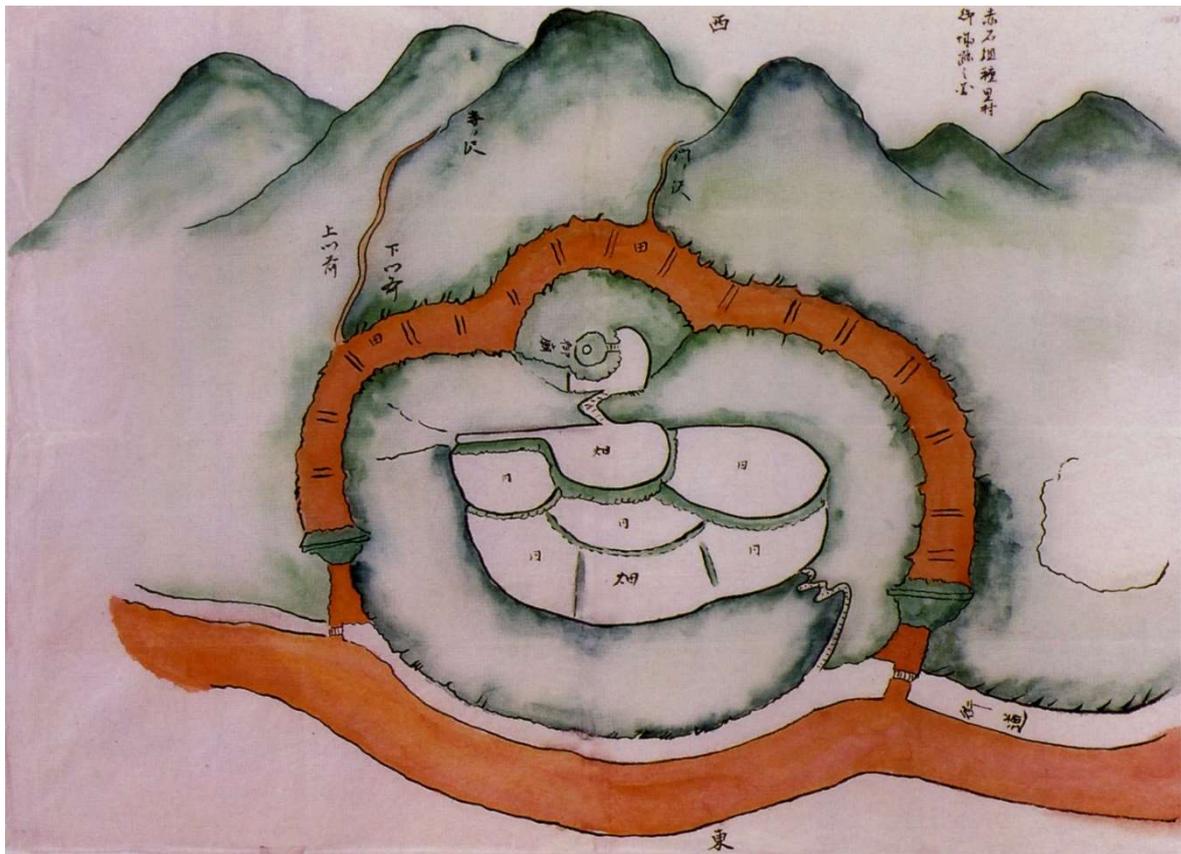
南部光信の種里入部と勢力分布図
(15世紀後半～16世紀前半)



津軽氏・大浦氏居城の変遷



史跡津軽氏城跡 堀越城跡・弘前城跡 位置図



「赤石組種里村御城跡之図」文化15年(1818) 原本：国文学研究資料館蔵 陸奥国弘前津軽家文書
 主郭の三方を堀がめぐり、東側には赤石川の旧河道とみられる部分が着色されている。郭内の平場や土塁の描かれ方は、現在の地形に対比できる。また「下門前」「上門前」「寺ノ沢」の寺院関係地名が記されている。



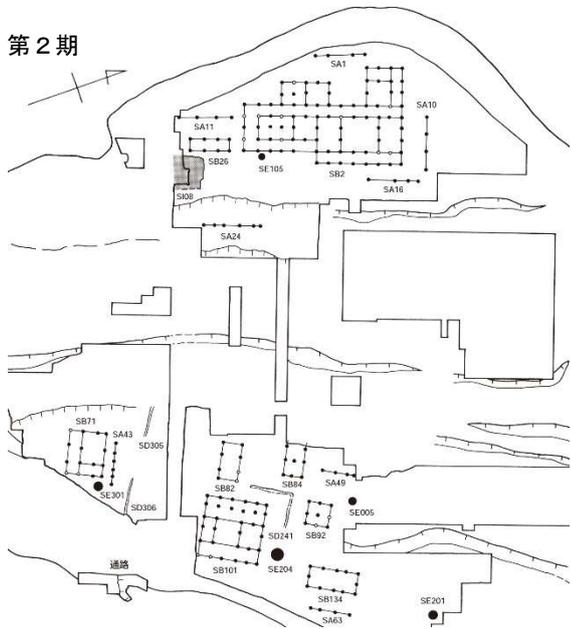
主郭の建物配置復元図(第2期：16世紀前半)

主郭の虎口(出入り口)については、文化15年の城跡絵図にも描かれる現在の登り道の他、郭の東側斜面から登る通路跡が発掘調査により確認されている。

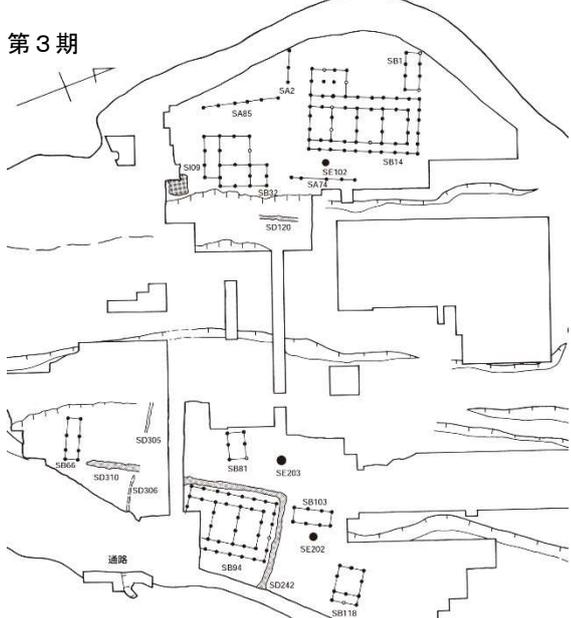
第1期



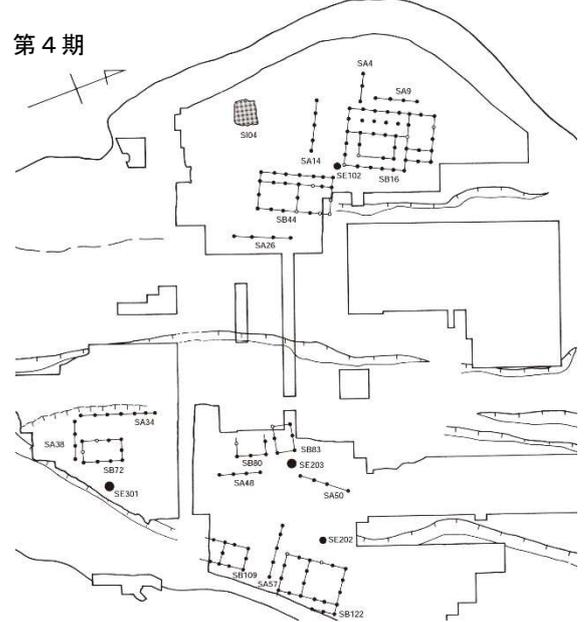
第2期



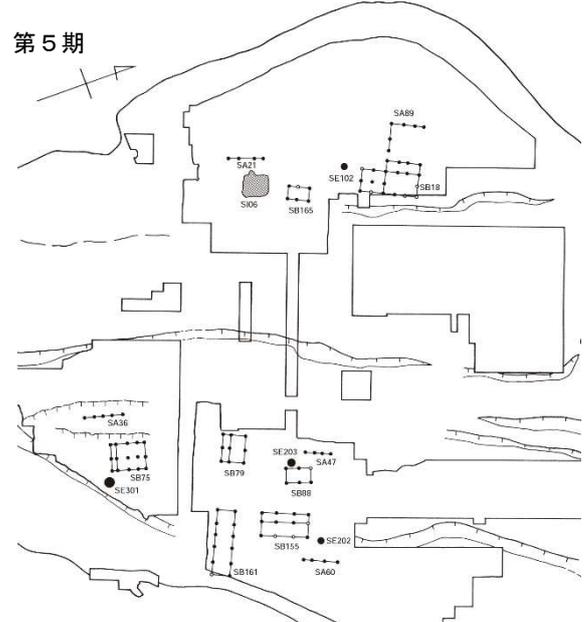
第3期



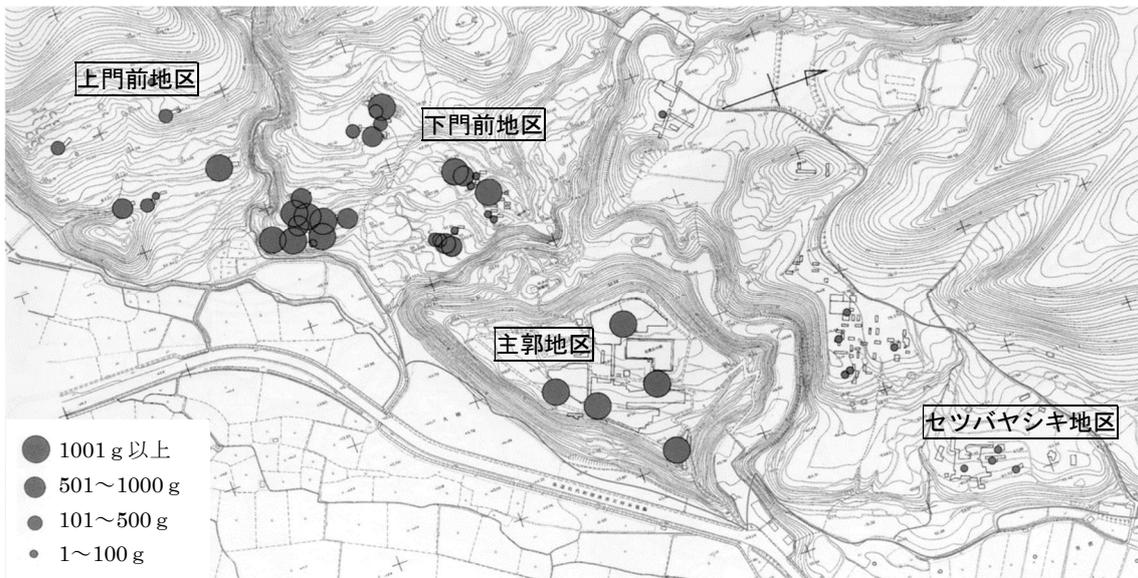
第4期



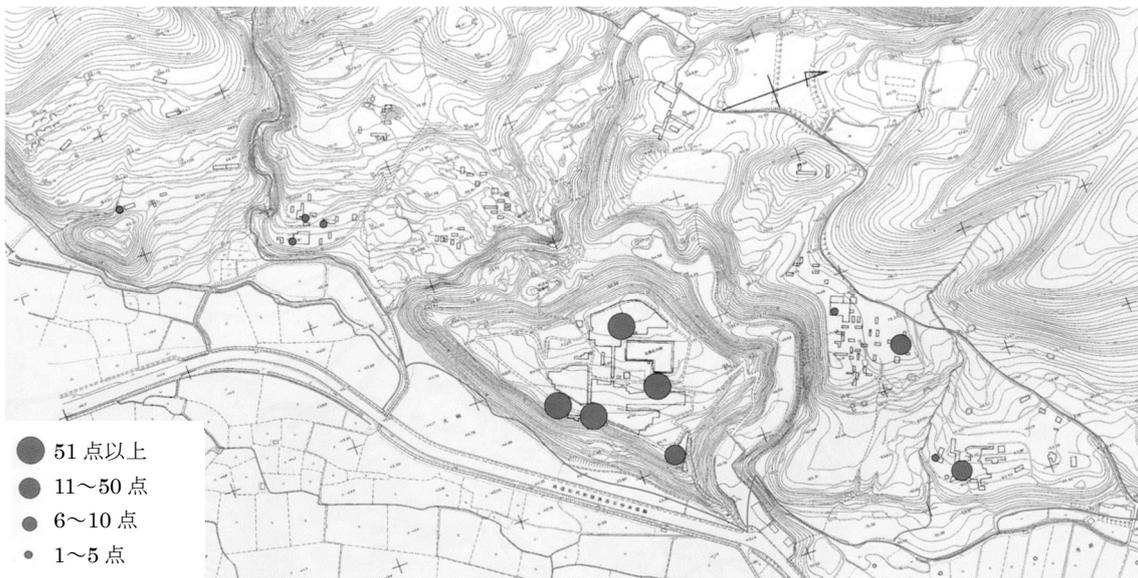
第5期



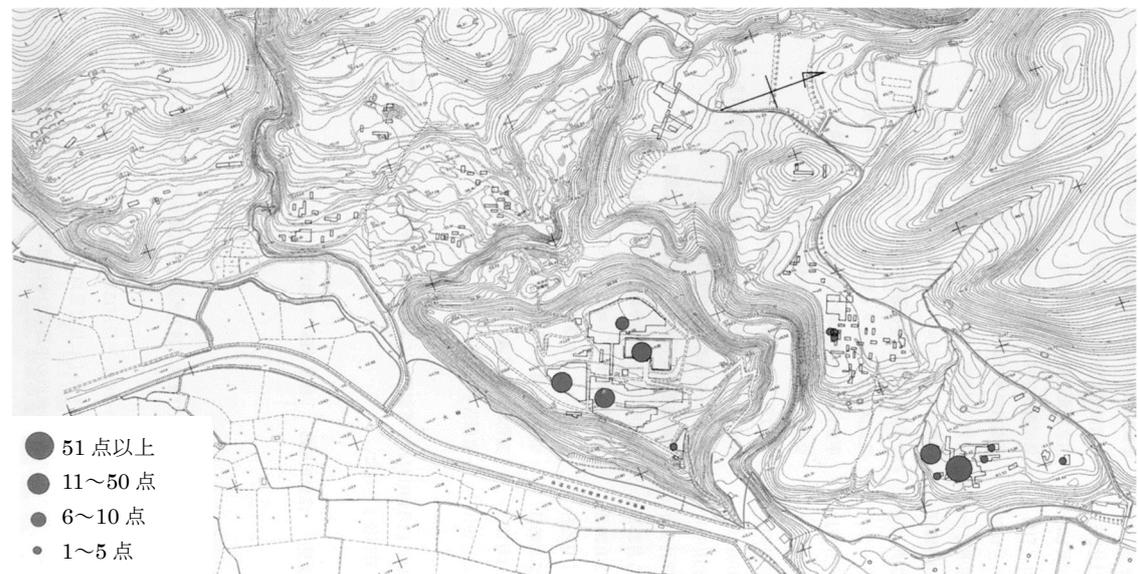
主郭地区の遺構変遷案



平安期の遺物分布 (10世紀後半~11世紀)



中世後期の遺物分布 (16世紀)



中世末~近世初期の遺物分布 (16世紀末~17世紀初)

光信公ゆかりの地紀行1

秋田県横手市 〈光信公のルーツを訪ねて〉

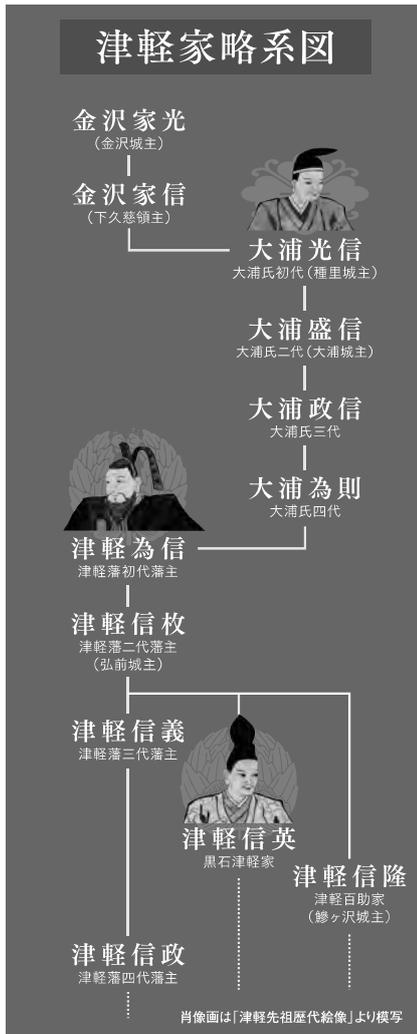


津軽藩始祖とされる武将・大浦光信公が、岩手県久慈から鱒ヶ沢町種里に入部したのは延徳3年（1491）。今年、光信公入部から530年目にあたります。

戦乱の世を生き延びた光信公ですが、そのルーツをひもとけば、現在の秋田県、岩手県、青森県にまたがる壮大な歴史ストーリーが浮かび上がってきます。今月号から、知られざる歴史の縁で結ばれた光信公ゆかりの地をご紹介します。いきましょう。

■光信公の先祖を探る

津軽家では、津軽統一の出発点となった大浦光信が「始祖」として代々敬われてきました。ところで光信以前の系図はどうなっているのでしょうか。



肖像画は「津軽先祖歴代絵像」より模写

●歴史紀行マップ



横手市のプロフィール

横手盆地の中央に位置する秋田県南部の中心都市。B級グルメの横手焼きそば、2月に行われる伝統行事の「かまくら」などが全国的に有名。

現在、最も信ぴょう性が高いとされる「高屋家文書」の藩の公式史書「津軽一統志」付巻）などによると、光信の祖父・金沢家光までルーツをさかのぼることができます。

金沢家光―南部氏の一族で下久慈の領主でしたが、後に仙北の金沢城（現在の秋田県横手市）に入ったとされる人物です。家光はその後、地元の小野寺氏らとの戦いに敗れ、あえなく自害したとされています。

家光が自害した時、その子の家信はまだ3歳の若君でした。家信は、家臣の大曲和泉守に抱かれて南部領へ逃れ、下久慈の領主となります。やがて家信の子として生まれたのが光信でした。

横手で非業の死を遂げた祖父、久慈への若君の逃避行、そして誕生した光

■金沢家光の城

光信の祖父・金沢家光の城だったとされるのが横手市の金沢城です。広大な横手盆地を見わたせる山上に築かれ



金沢城の航空写真(横手市教育委員会提供)

信は鱒ヶ沢町へ赴くことに。数奇な運命に翻弄されながら、光信とその一族は戦国乱世を生き抜いていくこととなるのです。

ており、本丸や二の丸を中心とした大規模な戦国時代の山城の姿がそのまま残っています。

城跡の発掘調査では、金沢家光の時代に対応する陶磁器類も出土しており、当時、仙北地方に勢力を持っていた南部氏の城であったことが推定されています。さらに城跡の周辺では、平安時代後期の後三年合戦の舞台となった「金沢柵」の候補地として、現在も横手市教育委員会による発掘調査が続けられています。金沢城や金沢柵に関する資料・出土品は、すぐ近くの「後三年合戦金沢資料館」で見学することができます。

久慈市から奥羽山脈を越えて約137km、鱒ヶ沢町から約160kmも離れたはるか遠方の地に、光信公のルーツがつかつていたというのは驚きです。この地で生涯を終えた金沢家光に思いをはせながら、いよいよ津軽藩誕生への歴史の旅が始まります。

(町学芸員 中田)

光信公ゆかりの地紀行2

岩手県久慈市 光信公のふるさと

戦国の世を生きた武将・大浦光信公ゆかりの地をめぐる歴史紀行。今回は、光信公の出身地とされる岩手県久慈市を訪れます。

前回、秋田県横手市で非業の死をとげた金沢家光（光信の祖父）でしたが、幼子の家信は、家臣とともに南部領へ逃れます。家信は、もともと父の領地であった下久慈に戻り、後にその領主となりました。

やがて家信の子として光信が誕生します。このことは、津軽藩の公式史書「津軽一統志」付巻の「高屋家文書」などでも裏付けられています。まさに久慈市こそが、光信が生まれ育ったふるさとだったのです。

■下久慈を訪ねて

当時の光信の根拠地「下久慈」はどこだったのか？ 現在、久慈市内に下久慈という地名はありませんが、近年の研究では、久慈湾に注ぐ久慈川の河口付近、かつて長久寺があったとされる田屋町、新井田地区ではないかと考えられています。

長久寺跡にある田屋公園には、下久慈と光信との関わりを紹介する説明板があるので、ぜひ一度訪れてみてください。

■久慈氏と久慈城

一方、久慈川の上流部は「上久慈」と呼ばれ、光信と同族である久慈氏が治めていたとされています。久慈氏の

●歴史紀行マップ



久慈市のプロフィール
 岩手県の太平洋沿岸に位置し、国内最北端で漁をする「北限の海女」、NHK連続テレビ小説「あまちゃん」ロケ地、国内最大の「琥珀」採掘地などで知られる。平成30年、久慈市と鱒ヶ沢町は「歴史文化で結ぶ友好協定」を締結しました。



久慈城跡（久慈市指定史跡）

居城である久慈城は、久慈川河口から約8^{km}離れた大川目町の丘陵上に築かれ、天然の要塞となっている山城です。太平洋に流れる久慈川沿いの地形や風景は、不思議なくらい種里城のある赤石川流域と良く似ています。

また、最近では、光信から5代目の大浦為信（後の津軽藩初代藩主）も、実は久慈氏一族の出身であり、大浦氏に婿養子に入ったという説が有力です。久慈と鱒ヶ沢、そして久慈と津軽藩とのつながりは、二重の意味で歴史の縁が深いのです。

久慈氏はその後、天正19年（1591）の「九戸政実の乱」で天下統一を目指す豊臣軍に敗北し滅亡しました。

■光信公実在の手がかり

久慈市には、光信の実在をうかがわせる史料も残っています。長内町の蛭子神社にある文明13年（1481）の



蛭子神社棟札（久慈市指定文化財）



光信公ゆかりの蛭子神社

棟札には、南部信濃守の嫡子・右京助久信が金峰山社檀を建立したと書かれており、南部信濃守は光信の父・家信右京助久信が光信本人と推定されています。蛭子神社は、もとは薬師如来を祀る金峰山西光寺という寺でした。

寛正元年（1460）生まれとされる光信は、この時22歳。おそらく当時は「南部光信」を名のっていたと考えられます（蛭子神社棟札は「光信公の館」で複製写真が見学できます）。

この棟札からちょうど10年後の延徳3年（1491）、光信は久慈の地を離れ、はるばる鱒ヶ沢町の種里城に向かうこととなります。次号「光信公がくる」にご期待ください。

（町学芸員 中田）

光信公ゆかりの地紀行3

久慈から種里へ 光信公がくる



岩手県久慈で生まれた南部光信（後の大浦光信）は、延徳3年（1491）3月1日、鱒ヶ沢町種里城に入部しました。いったい光信は、どのルートを通って久慈から種里へ向かったのか？今回はその謎に迫ります。

当時、津軽地方では、十三湊（五所川原市）を支配していた安藤氏が南部氏に攻められて北海道へ敗走。その後、西海岸を中心に、津軽を奪還しようとする安藤氏と南部氏の激しい合戦がくり広げられていました。

この時、南部氏による津軽派遣軍の司令官として選ばれたのが、下久慈の領主で当時32歳だった南部光信でした。光信には、久慈から350人の軍勢が従ったとされています。



戦国時代の勢力圏と津軽への道



雪路を行く光信公の軍勢 切り絵「光信公一代記」(長尾金之助作)

■3つの道筋

光信が通った道筋について書かれた史料は残っていません。しかしこの時代、すでに南部氏は安藤氏との戦いに勝利し、津軽・下北半島まで支配地を広げていました。津軽には他に、南朝の雄・北畠顕家の末裔とされる浪岡北畠氏もいましたが、その勢力は南部氏によって支えられていました。久慈から津軽までの道筋は、ほぼ南部氏が掌握していたとみられます。

南部の軍勢が津軽に入る道筋は大きく3つ。主に①七戸から青森に出る北回りルート、②三戸から毛馬内(秋田県鹿角市)を抜ける南回りルート。さらに間道として③八甲田越えのルートがありました。

光信が種里城に入ったとされる旧暦3月1日は、今の暦でいうと春先の4月上旬。種里城跡の発掘調査では、女性の化粧道具を思わせる鏡、鍛冶職人がいたことを示す鉄器類も出土しており、軍勢とともに、家族やその従者、職人や人夫たちも一緒に連れて来たと考えられています。

3つの道筋のうち、どのルートを通ったかは不明ですが、雪深い津軽への道のりが、光信一行にとって苦難の道であったことは確かでしょう。

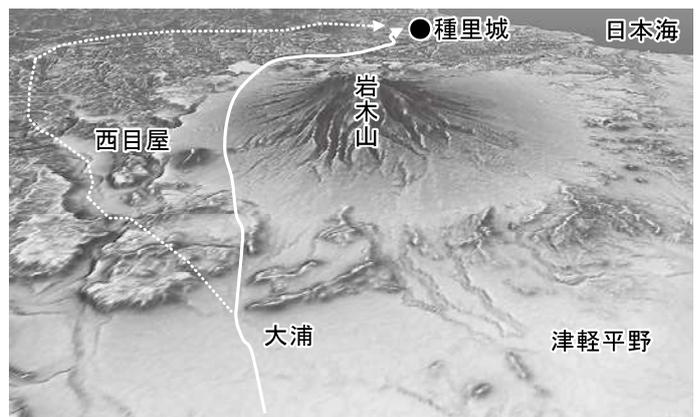
■光信、種里へ

さらに津軽に入ってから、種里城に行くには、その先が問題でした。檜山安東氏（安藤氏本家の廃絶後、秋田に再興）が日本海側から津軽への侵攻を繰り返し、鱒ヶ沢などの沿岸地域は、制海権をもつ安東氏側の勢力下にあったからです。

そのため光信は、津軽内陸部から海岸には出ずに、岩木山南麓の山道を通って赤石川上流の種里城に入ったと考えられます。現在、専門家の間では、



黒森にある「殿様の井戸」



種里城への道

安東の軍勢を退けながら、大浦↓岳↓松代↓黒森↓小森通って種里に出たというルートが推定されています。道沿いには、後に光信が築いた大浦城（弘前市）、光信が休んだという殿様の井戸などの史跡が残っています。

一方、種里からさらに上流の大然にも、この時、光信一行を泊めたという伝承があります。大浦から西目屋を通り、白神山地から赤石溪谷に入ってくるルートだったのかもしれない。

今から530年の昔、光信とその一行が、どんな思いではるばる種里の新天地を目指したのか。その道中に、歴史が語らない数々の人間ドラマがあったように思えてならないのは、私だけでしょうか。

(町学芸員 中田)

光信公ゆかりの地紀行4

種里城と古戦場 光信公戦記



戦国時代初めの延徳3年（1449）、南部光信（後の大浦光信）は、32歳で故郷の岩手県久慈を離れ、鱒ヶ沢町種里城に入部しました。当時の種里城は、日本海沿岸から津軽平野への侵入をもくろむ安東氏との攻防の最前線。赤石川下流にはさまざまな敵対勢力がひしめいていたと考えられます。舞台はいよいよ戦乱の種里へ。今回は、種里八幡宮「奈良家文書」などによって伝えられる光信公ゆかりの古戦場を訪ねてみましょう。

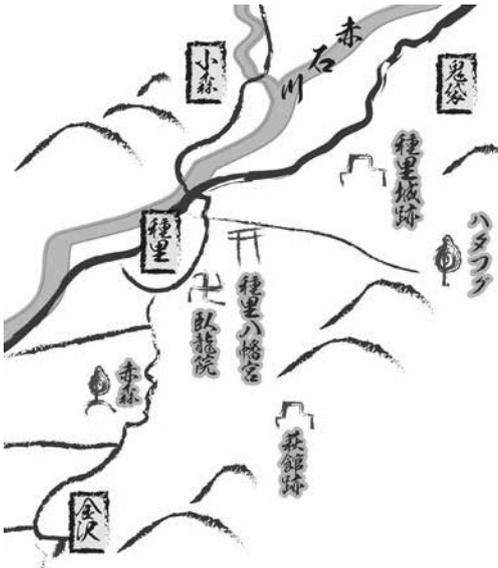
たとわれます。光信は館前館を攻めましたが、館には水を満たした堀があつて軍勢を寄せつけません。実はそれは水ではなく、城主の奥方が機転をきかせた策だったので。光信の家臣・奈良主水貞親（後の種里八幡宮初代宮司）は見事その策を見破り、一挙に館前館を攻め落としたとされます。館前館は、赤石川と津軽沢に面した急峻な地形を利用した天然の要害で、さらに後方を守る二重の堀が今も残っています。

■館前館攻略

種里城から赤石川を約4km下った館前館の城主・対馬氏は、海へ出ようとする光信の行く手を阻み、矢を射かけ

■萩館の合戦

一方、光信は、種里とは目と鼻の先の萩館の城主からも攻撃を受けていま



種里城周辺の史跡（白神赤石道中絵図より）



館前館の二重堀（館前町）



萩館を攻める光信公の軍勢 切り絵「光信公一代記」(長尾金之助作)

した。萩館は、種里と南金沢の村境の丘陵にあり、人工的な平坦地や堀などが広範囲に残る大規模な城郭です。光信の命をうけた奈良主水は、軍勢を二手に分け、前後の門から萩館を強襲。火を放ち鬨の声をあげて攻めかかると、城兵はあわてふためき、わずかの時間で落城したとされています。この他、萩館付近の旧街道沿いには、立派な根上りの赤松が生えている「赤森」という塚があります。種里城への入り口を守る木戸（門）があつたとされる場所、松は光信により手植えされたものと伝えられています。昭和50年代には場整備される前までは、この塚の所で道路が折れ曲がり直進できないルートになっていました。敵の侵入を防ぐための柵形があつた名残とされており、この一帯が緊迫した戦闘地域であつた時代の面影をしのぶことができます。

■種里八幡宮と切明道

奈良家文書によると、館前館や萩館の城主によって海への道を閉ざされていた光信は、種里八幡宮から山越えして深浦町関へ抜ける「切明道」を開いたとあります。道沿いには通称「ハタフグ」の松があり、光信の軍勢が旗や鉾を立てかけて休んだという伝承地にもなっています（松は残念ながら令和元年に強風で折れてしまいました）。奈良家文書は江戸時代になって書かれたものですが、少なくとも当時伝わっていた光信公にまつわる伝承を記録した史料として注目できます。光信が種里城に入った当時、近隣には敵対する群雄が割拠し、さらに西の大敵である安東氏が迫ろうとしていました。次号、光信がその生涯を過ごした種里城から、津軽藩誕生への物語が始まります。（町学芸員 中田）



赤森（種里町・南金沢町の境）

光信公ゆかりの地紀行5

津軽藩発祥の地 光信公ここに眠る



延徳3年(1491)、岩手県久慈から来た南部光信(後の大浦光信)が本拠地としたのが、鱒ヶ沢町の種里城です。光信は、この城を足がかりに近隣の群雄と戦い、西の大敵である安東氏と対峙し続けました。

光信が生涯をかけた種里城とは、どんな城だったのか? 今回はその実像に迫りながら、津軽藩誕生への道を開いた光信の後半生を追います。

■光信公の城・種里城

種里城というと、資料館「光信公の館」だけかと思いがちですが、本当の城の姿は、私たちの想像をはるかに超えたものでした。まず圧倒されるのは、



種里城の航空写真



主郭の復元模型(「光信公の館」で展示中)

入り口の駐車場から歩いてすぐの巨大な堀。全国的にもあまり例がない大きさで、深さ20m以上、幅約70mもあり、城外から攻めてくる敵の軍勢を寄せつけません。

この堀に守られた城の中心部「主郭」では、発掘調査によって内部の様子子が明らかになっていきます。城主光信の館とみられる大型建物は、主郭の最も高い場所に建てられていました。城主の館の下端には、小型の建物が建ち並んでおり、一族や家臣の屋敷地があったと考えられています。

一方、主郭の北側(現在は杉林)にも「侍屋敷」と呼ばれる平坦地が広がっており、光信の軍勢が駐屯した居

住区だったと推定されています。光信が築きあげた種里城は、強敵・安東氏に対する一大軍事基地であり、難攻不落の大要塞だったのです。

■光信公の死去

種里城に入った光信を待っていたのは、前回紹介したような激しい合戦の日々でした。赤石川流域に勢力を広げた光信は、文亀2年(1502)、岩木山麓の津軽平野側で大浦城(弘前市)を築き、嫡男・盛信に与えます。後に盛信が当主になってからは大浦城が本拠地になりますが、光信自身は種里城に残って安東氏の侵攻に備えたのでした(以後「大浦光信」となる)。

大永6年(1526)、病の床にいた光信は、「甲冑を着せた立ち姿で東南に向けて埋葬せよ」と遺言しました。死んだ後も自分の靈魂は種里の地にとどまり、敵の侵入を許さず、子孫



盛信や家臣らに遺言を残す光信公 切り絵「光信公一代記」(長尾金之助作)



光信公御廟所(種里城内) 津軽家や種里住民により今も大切に保存されている。御廟所には一本の雑草も生えないと伝えられる。

の代には必ず津軽を平定することを願ったとされています。

同年10月8日、光信は67歳で死去し、遺言のとおり種里城内に埋葬されました。光信の墓は「御廟所」と呼ばれ、現在も城跡の一角に残っています。またその傍らには、切腹して光信の死に殉じた忠臣・奈良主水貞親(種里八幡宮初代宮司)の墓も寄り添うように残されています。

後に、光信から5代目の大浦為信(後の津軽為信)が、南部氏の支配から独立して津軽藩を創業。始祖光信の居城であった種里城は「津軽藩発祥の地」とされるようになります。

秋田県横手市、岩手県久慈市と流転してきた一族の血を受けつぎ、数奇な運命に翻弄されながら戦国の世を生き抜いた武将・大浦光信―この英雄の魂が眠る種里の地で、一つの伝説が終わるのでした。(町学芸員 中田)

光信公ゆかりの地紀行6

青森県弘前市 津軽藩誕生の地



大永6年(1526)10月8日、大浦光信は鱒ヶ沢町種里城で67歳の生涯を閉じます。南部氏方の武將として、岩手県久慈からはるばる種里の地に赴き、強敵・安東氏との攻防の最前線に立ち続けた波乱の生涯でした。

さて光信の没後、その後継者たちは、戦国の世をどのように生き抜いていったのでしょうか。今回は、大浦氏その後をたどって、津軽藩誕生の地となった青森県弘前市を訪れます。

■2代盛信と大浦城

文亀2年(1502)、光信は種里城に次ぐ第二の拠点として大浦城を築き、嫡男・盛信に与えます。大浦城は、岩木山の東麓に位置し、種里城と津軽

平野を結ぶ街道の出入り口にあたる交通の要所を押さえた城でした。現在、城跡の大半は弘前市立津軽中学校となつていますが、付近には堀跡や土塁跡が明瞭に残っています。

盛信が2代目を継承してからは、この大浦城が種里城に代わって大浦氏の本拠地となります。3代政信、4代為則、5代為信まで大浦城を居城とし、その勢力は岩木山麓一帯から、いよいよ津軽平野に覇をとる時代を迎えたのでした。

■5代為信と堀越城

永禄10年(1567)、大浦氏4代目の為則は、死に臨んで一族の為信を娘成姫の婿とし、5代目の家督を継が



堀越城(弘前市・国史跡)

せました。やがて為信は、南部本家(三戸南部氏)の家督争いに乗じて、南部氏の城を次々と攻略。戦国の風雲児として津軽統一を果たすこととなります。光信の種里入部から約100年後の天正18年(1590)には、豊臣秀吉から所領を安堵され、ここに津軽藩が誕生しました。

津軽藩初代藩主となった為信は、姓も津軽氏に改めて「津軽為信」を名のり、文禄3年(1594)に大浦城から堀越城へと本拠地を移します。堀越城は、為信が津軽支配の新たな政治的中心地とした城でした。現在、城跡は弘前市によって全面的な公園整備が行われています。

■津軽氏歴代の城・弘前城

津軽氏が弘前城の築城に着手するのは、津軽為信が新たな町屋の地割りを行ったことに始まるとされます。為信の没後は、2代藩主となった信枚に引き継がれ、慶長16年(1611)には



大浦氏・津軽氏の城の移り変わり



大浦城(弘前市)



弘前城(弘前市・国史跡)
岩木山の反対側が「発祥の地」である種里



津軽為信像
(弘前文化センター前)

堀越城より本拠を移転。城下町弘前は、江戸時代約260年間にわたって津軽地方の中心地となりました。

実は、弘前市にある大浦氏・津軽氏の城(大浦城・堀越城・弘前城)と、鱒ヶ沢町の種里城は、岩木山の山頂をはさんでほぼ直線上に並んでいるのをご存じでしょうか。つまり、弘前側から岩木山を遥拝すると、ちょうどその裏側に種里城があるという位置関係です。

始祖光信から為信につながる津軽藩誕生の物語は、悠久の時を越えて、今も一本の柱のごとく、弘前市と鱒ヶ沢町の大地を貫いているかのような気がしてなりません。(町学芸員 中田)

光信公入部530年記念「津軽藩ゆかりの地PR展示会」開催中

場所：日本海拠点館 1階冬の広場(月・火曜日休館) 期間：10月31日(土)まで 9:00~17:00

光信公ゆかりの地紀行7

長勝寺と禅林街 ～弘前お寺めぐり～



光信公
津軽藩始祖
入部530年

大浦光信を始祖とする津軽藩の城下

町弘前。江戸時代約260年にわたって津軽地方の中心地となったこの町に、実は、鱒ヶ沢町種里と関わりをもつお寺が多いのをご存じでしょうか。

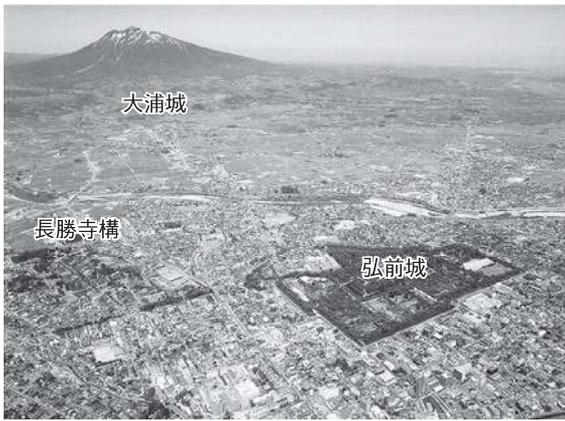
弘前城の南西、西茂森には、長勝寺を中心として曹洞宗寺院三十三カ寺が立ち並び「禅林街」と呼ばれています。寺は、弘前城の築城と同時期に領内各地から集められ、土塁や堀を設けて寺院街そのものを城の守りとしたことから「長勝寺構」とも言います。

今回は、禅林街のお寺の歴史をひも解きながら、弘前にある光信公ゆかりの地を訪ねてみることにしましょう。

■光信公の寺・長勝寺

禅林街の中心、一番奥に鎮座するのが津軽家の菩提寺である長勝寺です。

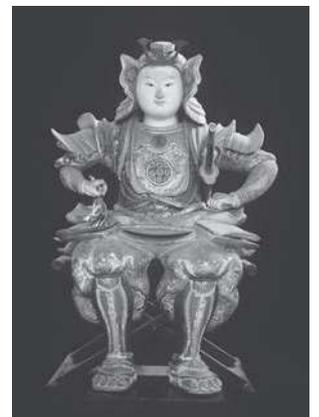
長勝寺は、大永6年(1526)に光信が没した後、2代目盛信が父の菩提を弔うために種里に創建した寺とされます。光信公の戒名「長勝隆栄大居士」から二字をとって長勝寺と名づけられました。寺が建てられた場所は、種里城主郭の南、現在は杉林となっていて通称「門前地区」であったとされています。その後、大浦氏(津軽氏)の本拠地の移転に伴って、種里から大浦、ついで堀越、弘前へと移ってきました。つまり長勝寺は、もともと種里に



弘前市航空写真 (弘前市教育委員会提供)



太平山長勝寺 (弘前市西茂森)



大浦光信像 (長勝寺蔵)

あった光信公のお寺だったのです。現在も長勝寺には、享保10年(1725)の光信公200年忌を記念して制作された光信木像が安置されています。

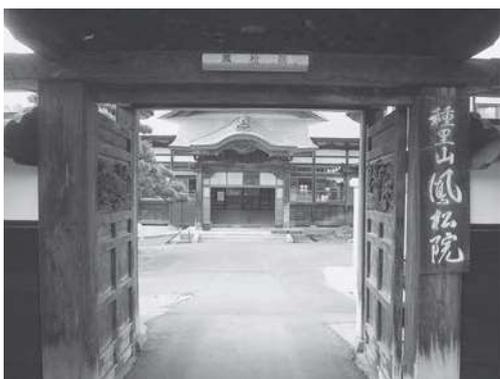
■海蔵寺

禅林街の黒門をくぐって左側2番目にある海蔵寺も、光信公ゆかりの寺です。海蔵寺は、光信が岩手県久慈から種里城に入部後、先祖の菩提寺として建立した寺とされます。

海蔵寺も、後に長勝寺と共に種里から大浦へ移り、さらに、大浦から弘前に移りました。種里の海蔵寺があった場所は不明ですが、種里集落内には「海蔵寺開創の地碑」(昭和57年・海蔵寺建立)が建てられ、現在も関係者のお参りが続けられています。

■鳳松院

黒門から右側2番目の鳳松院の山号は「種里山」。その名のとおり種里にあった寺です。津軽為信により種里村に創建され、弘前城築城とともに弘前に移ったとされます。鳳松院が移った後、その跡地に建立されたのが種里集落に現在もある臥龍院とされています。



種里山鳳松院 (弘前市西茂森)



大浦山海蔵寺(弘前市西茂森)

この他、清安寺も旧寺名を「松源院」と言い、長勝寺3代住職の隠居寺として、もとは鱒ヶ沢町赤石にあったとされます(現在の松源寺のある場所)。皆さんもきっと、弘前市のお寺を散策してみるだけで、光信公からつながる歴史の足あとに出会えることでしょう。ぜひ一度訪ねてみてください。

(町学芸員 中田)